詩

福冨忠雄（ふくとみ ただお）

下関市
（1910～1984）

【著作】
詩集『青蟹』
詩集『故郷の絵』（昭和30・こだま詩社）
詩集『石庭のうた・秋のいろ』（昭和34・詩帖社　共著）　ほか

【関連情報】
資料所蔵・下関市立菊川図書館
（現地研究者　稲田　眞）

福冨忠雄の詩は、ちょっと近寄りがたい作風で、や
や硬質な表現や比喩は難解といっても言い過ぎではな
い。しかしそこに独特な気品がある。

旧制の中学五年の時、正規の学業からリタイヤした
ことは、さぞ残念なことであったことと思う。しかし、
あれだけの漢字漢語を駆使しての、言うなれば高踏的
な詩を書いたことは、当時としても異色であった。

その上、謙虚で人ざわりの良い人柄はだれからも敬
愛された。われわれ貧しい文学青年の集まりでは、彼
は断然気前が良く、金を出し惜しみしなかった。

昭和初年、プロレタリア詩やシュールレアリスムの
もてはやされた時代に、俳句的な自然観賞と郷土の風
物に焦点を絞った詩はまねのできないものがあった。

一方、中央・地方を問わず寄稿・投稿をしたバイタ
リティーは敬服にあたいする。今、関係した詩誌・文
芸誌をあげてみても、まことに多彩である。

『若草』『愛誦』『鯱』『日本詩壇』『昭和詩人』
『火の山』『詩園』『流域の詩』『九州文学』『郵政
詩人』『広島郵政』『断層』『木屋川』『詩帖』『こ
だま』『文芸風土』『文芸山口』等。

福冨忠雄の第一詩集『青蟹』について、詩人の宗野
真幌は、「典雅なよい詩集である」と、自分の第一詩
集『紫巾』と比較して述べている。

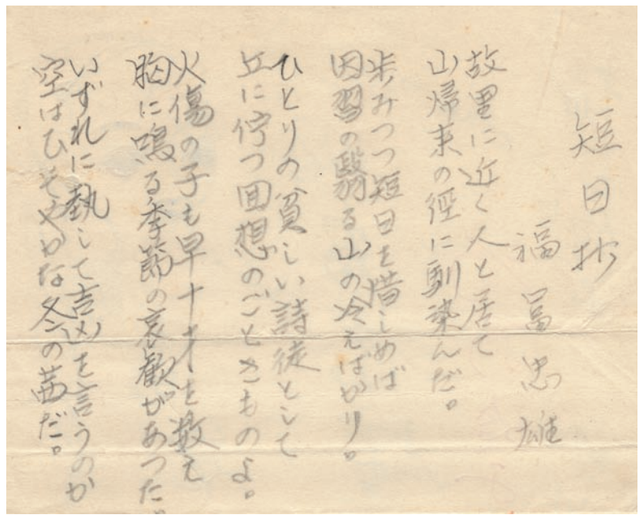
また、私は彼の詩集『故郷の絵』の跋文で、次のよ
うにも述べている。

「たしかに福冨氏の詩はおかしがたい一種の風格を
もっており、孤高とさえみえる厳しいノミの冴えをみ
せている。その独特な観照的態度はいまどき珍しく、
誰にも真似のできない名人芸である。」

最後に温厚篤実の一語に尽きる福冨氏が、あまりに
早く詩と決別したことは未だになぞである。

（文・和田　健）

長谷執持との共同編集『詩華集山口縣詩選』



鉛筆で書かれた直筆の詩

木屋川抄

あたりにふかい閑寂を誘い
あまたの支流を注がせている
あれは確かな暗示とその聲調であろうか。

茫茫として暮れる日の
乏しい人影の中の
ただ一条をあかし
真実わたしの心にまで響く
冬の木屋川。

県道にそうて立つ叢林にも
いつか露霜はふふませて
ときに蝕するものさえ惜しむ
今昔の彩管よ。

きょう川岸にせつなく堪える
疎い籬のかげ
その梅花の一枝とあれば
この小躯に何のおそれとてなく
僅かに自らのまぶたのいたむのみ。

（詩集『故郷の絵』（こだま詩社）より）

福冨忠雄　年譜

明治43（一九一〇）年			1月2日、山口県豊浦郡川棚村（現・下関市豊浦町大字川棚）に父福冨新平、母ユキの次男として生まれる。当時、父は小学校長。
昭和3（一九二八）年	一八歳	5月30日、県立豊浦中学校5年生の時に、病気のため中退。中退後は療養のかたわら文筆活動を行い、主として現代詩に専念。全国的文芸誌『若草』『愛誦』などに投稿。	
昭和12（一九三七）年	二七歳	日本詩人会に籍をおき、『日本詩壇』の同人として活躍。この間、詩集『青蟹』を出版。	
昭和13（一九三八）年	二八歳	7月15日、詩友、長谷執持と共同編集で本県最初の『山口県詩選』を白銀日新堂書店より刊行。このころ筆名を亡兄の福冨武人の名を借りてつける。出版記念会に種田山頭火も列席。	
昭和16（一九四一）年	三一歳	8月8日、山頭火、福冨家を訪ねる。そのときの句「やうやくたづねあててかなかな」。	
昭和17（一九四二）年	三二歳	9月1日、下関市本町四丁目の特定郵便局長となる。同年9月10日、山口市から詩誌『詩園』が創刊され同人となる。	
昭和20（一九四五）年	三五歳	5月18日、豊浦郡豊東村大字田部（現・下関市）橋本節子と結婚。	
		6月29日と7月2日の二度の空襲により、局舎焼失。所有の書籍が灰になる。	
昭和23（一九四八）年	三八歳	9月30日、局長を一時休職。豊浦郡豊田中村大字鷹子へ疎開。	
昭和27（一九五二）年	四二歳	3月16日、豊浦郡岡枝村（現・下関市）の岡枝郵便局長を任命さる。	
昭和28（一九五三）年	四三歳	11月20日、詩華集『木屋川』発刊。	
昭和29（一九五四）年	四四歳	2月、詩誌『詩帖』創刊。主宰者となる。	
昭和30（一九五五）年	四五歳	2月、詩華集『豊浦統』を吉木寿雄（長府）と共編で発行。	
昭和33（一九五八）年	四八歳	6月、詩集『故郷の絵』をこだま詩社より発刊。	
昭和34（一九五九）年	四九歳	11月12日、第九回山口県芸術文化振興奨励賞を授与さる。	
昭和43（一九六八）年	五八歳	11月、詩集『石庭のうた・秋のいろ』を詩帖社より吉木寿雄と共著で刊。	
昭和44（一九六九）年	五九歳	6月30日、岡枝郵便局長を退職。	
昭和59（一九八四）年	七四歳	9月、大阪府茨木市に移り家族と同居。	
		10月25日、大阪府寝屋川の次女の家で死去。同日付にて、勲六等瑞宝章を受ける。	

（提供・和田　健）